

近代を問い直す①

現代宗教研究室

一、意図

伝法院発足以来、『真言密教の現代化』という総合テーマのもとで、十年間にわたって総合研究を進めてきたが、その過程で次のようなことが浮かび上がってきた。

- ① 現代は近代の延長線上にあると位置づけることができる。
- ② その近代的価値観（科学的合理主義・近代的自我の確立・人間中心主義）は、今に至ってかなり閉塞化し、行き詰まっている。
- ③ 「現代化」とは「近代の延長としての現代」を批判し、超克（相対化）することによってもたらされる。
- ④ 「真言密教の現代化」とは、真言密教を近代的価値観に拘泥されない視点（現代化された視点）から解釈しなおし、さらに新しく解釈された真言密教によって「近代の延長としての現代」を打開していくことである。

これらのことを踏まえ、平成十年度より『仏教の社会的機能』という総合テーマが新たに掲げられた。これは、『真言密教の現代化』をより具体的に展開していくために、まず、これまで仏教が社会とどのようなスタンスで関わり、どのような機能を果たしてきたのかということを検証しようという意図で設定されたものであろう。そして、その際、「近代」というものを大きなエポックとして捉え、「近代」が我々に何をもたらし、何を変化させたのかという視点から、このテーマについて考えていこうという方向性をもつことになった。

こうした問題意識のもとで、平成十・十一年度は、A・B両グループに分かれて研究を進め、さらには二回の講演会を開いて理解を深めてきたが、それらを通じて次のようなことがあきらかになった。

①日本の「近代」は、欧米と比較して、かなり特殊な形でもたらされた。

②日本の「近代化」に伴う、行政的・制度的変革と日本人の心性の変化の間には、時間的あるいは質的ギャップがある。

③従って、行政的・社会的変革という視点のみで、歴史(時代)区分を設定し、さらにはそれによって社会あるいはその中の人々のあり様を理解しようとするには無理がある。

④心理的、思想的、芸術・文化的側面などからも、日本人の心性あるいは社会の変遷を辿っていく必要がある。

⑤日本における「近代」というもの、あるいはその区分を④の視点から、もう一度洗い直してみる必要がある。(それによって、その延長線上にあると位置づけた「現代」をも洗い直すことになる。)

⑥その上で、仏教と社会との関係性、仏教の機能を探っていかなければならない。

『仏教の社会的機能』についての総合研究を進めていくためには、その前提として上記のような問題意識をも

つことが要請されるのではないだろうか。

そこで、現代宗教研究室では、日本の近代というものをこれまでとは違った視点、具体的には、大きな時代の変遷期に生まれた文学作品、あるいはその作者に焦点を当て、それを通じて、改めて日本の近代というものを問い直してみたい。

二、研究方法

現代宗教研究室に所属する各研究者に文学作品を割り当て、奥野研究員のみ明治時代の法制を担当し、テーマに沿って研究することになった。定期的に研究会を催し、活発な意見交換がなされた。各作者が近代化をどう捉え、どう悩んだのか考察し、近代を問い直す作業を行った。

担当一覧

二葉亭四迷	竹内照公	非常勤研究員
森 鷗 外	那須政玄	非常勤教授
田山花袋	山口幸照	非常勤研究員
永井荷風	鈴木晋怜	常勤教授
芥川龍之介	福崎孝雄	非常勤講師
有島武郎	大塚秀見	非常勤教授
石川啄木	原 豊寿	非常勤研究員
法 制 度	奥野真明	常勤研究員

三、個人研究成果（要約）

○二葉亭四迷

一般に、二葉亭四迷は、近代文学の始まりに活躍したとされているが、これは後の時代からの評価である。二葉亭四迷は、内容について『小説総論』によって何を描くべきかを明らかにし、かつ、「近代」を空想にとどめることなく具体的にとらえていながら、卑近な出来事を写すことだけに拘泥する立場と一線を画す創作を残したと評価されている。また、当時新聞連載で人気の圓朝落語を模した「言文一致」という試みや、堪能な外国語能力を武器に行われた翻訳は、「国民語」という表現の体系や、真に忠実な西洋文化受容への模索であったという。二葉亭四迷自身は自らに文学者と言う枠をはめていたとはいえず、文学にとどまらない広い領域に関心を持ち、多彩な活動をしている。このためか、二葉亭四迷自身が語っているように、作品が中途半端な結末になっていたり、言文一致も忠実な翻訳も完全なものとはなっていない。しかし、多方面での活躍をめざした二葉亭四迷であったからこそ、豊富な西洋に関する知識を背景に、言文一致のような工夫を行い、具体的に日本の「近代」を創作で切り取り、「近代文学」の端緒を開くことができたといえる。このような二葉亭四迷の意図は、近代文学に大きな影響を与えている。

○森鷗外

森鷗外は文学史上では浪漫主義と反自然主義の両方に配される。浪漫主義の代表作品のひとつに明治二三年の『舞姫』がある。鷗外自身がモデルの太田豊太郎で、秀才であり、ドイツに留学する。自由な雰囲気の中で、自我に目覚め、エリスに恋をする。そしてエリスは妊娠する。結局、エリスを裏切つて日本に帰ってしまう。明治

維新後、日本は西洋諸国から諸制度を早急に導入して近代的国家としての体制を作ることを課題としていた。近代国家を築く人材を養成するために、大勢の留学生が西洋諸国に派遣された。鴉外もその一人である。彼は急激な国家の発展による矛盾に対して激しく抵抗した。その中で日本は近代国家への道をつ走り、明治二十七年は日清戦争に勝ち、明治三十七年には日露戦争に勝ち、富国強兵政策が実を結んだ結果、日本の社会に矛盾が生じてくる。貧困・差別が代表的なものである。鴉外は、『高瀬舟』に見られるように、時代を江戸期にとりながら、そこに冤罪という近代的な社会問題を描いたり、さらには明治天皇崩御の折に、『興津弥五右衛門』で鴉外自身を絶対君主に帰依する乃木希典の像とダブらせつつ封建性への回帰を論じ、ここに、明治のエリートたちの一つのパターンがあり、西欧近代に心の落ち着きを見出せず、そこからの脱却を図る日本人像がある。つまり鴉外は近代の受容過程でとまどい、最終的には日本に回帰しなければならなかった。

○田山花袋

田山花袋は自然主義を代表する作家である。この自然主義は、科学的、実証的、という意味で、ありのままの生活をありのままに描写し、赤裸々に内面的な自分をさらけ出して、醜いところも含めきちんと正しく事実を見るものである。花袋は個を確立しようとして、ありのままの姿をありのままに描写した。その中で自我が目覚め、結果的に自らの不倫を告白し、人間の本能的なドロドロ世界を描くことになった。

○永井荷風

アメリカ・フランスへ留学し、西洋近代文明に直に触れてきた荷風は、形式だけを模倣し、それに追随しようとする日本の近代文明に大きな疑念を抱くようになった。また、熱病のように自我意識を追求し、尊重する明治の知識人のあり方、さらには、そうした知識人があたかも民衆を見下すような立場から世の中を眺めている態度

に、強い不満を抱くようになっていった。

荷風は自ら近代知識人であり続けることを放棄し、「下民」へと下降することによって、偽物に過ぎない明治の近代を超越しようとする。そしてその下降した世界が江戸情緒であり、花柳界であった。

荷風は、近代に逆行するもの、あるいは近代に置き去りにされたものに光をあて、また自らその中に耽溺することによって、浅薄な似非近代を批判し、進歩に憑かれた知識人達を冷やかに見つめていったのである。

○芥川龍之介

芥川龍之介は近代化がキリスト教文化の受け入れにあると考えたのではないだろうか。初期の作品はキリスト教に傾倒している。しかし日本の風土にキリスト教が合わないことに気づき、また受け入れられない自分に葛藤する。そうした中で芥川は「ぼんやりとした不安」を理由に自殺してしまうのである。

○有島武郎

有島も芥川と同じくキリスト教を受け入れようとした。しかし、放棄せざるをえなくなる。

『惜しみなく愛は奪う』で語っているように、有島は自分自身の自己存在を受け入れがたかったことが、一番の苦悩であった。恵まれた上流階級に属していることが、近代化、つまり自由と平等の実現の障害となっているという自覚である。

他の多くの知識人が、人間平等、権利の共有、階級差の否定を理論的に謳いあげたのに対し、有島は自己存在へもメスを入れたために、生涯葛藤に苦しむことになったのである。

○石川啄木

大逆事件以降、世の中が閉塞していると啄木は考えていた。啄木は社会主義のなかに解決を見いだそうとして

いた。啄木を担当した原豊寿研究員は次のようにまとめている。

「啄木の目には近代とは、江戸期の封建的権力の時代とは違った、もっと巧妙な絶対的な強権の時代と映ったに違いない。彼は社会主義の中にその権力の打破に向けた光明を見出したかに見えたが、二六歳という短い命がその理想の行方を見ることを阻んだ。彼はただ「時代は閉塞している」と叫んだに過ぎなかった。しかし、大逆事件以降、明治、大正、昭和という近現代の青年たちの心情に常に時代の閉塞感が横たわっていたことは、啄木の心情が一個の青年の単なる個人的感傷に過ぎないことではないことを示しているように思える。」

○法制度

大政奉還後、明治新政府は不平等条約を廃止させるために、西洋を見習った法治国家の形成をめざしていた。明治にできた六法のうち憲法と民法の親族法以外は現在も使用されている現行法規である。しかし、制度的近代化を成し遂げることに成功したが、社会的な近代化とは言い難かった。たとえば、自由と権利を保証するはずの法律なのに自由民権運動を結果的に弾圧してしまう。また民法は制定時に欧州のものを似せて作ったところ、「民法出でて忠孝亡ぶ」というように日本の風土になじまないという論がでて、一度廃案になっている。

四、まとめ

文学作品を考察する中で、各々の作者がその当時、つかみよのない近代を自分なりに捉えて、解決を見いだそうと苦しんでいた。その様子が作品の中に表れていた。

時代は明治維新という大変革を経ている。これまでのあらゆる制度がすっかり変わってしまった。制度の上では近代化を成し遂げている。

情報の面においては、鎖国時代に僅かづつしか西洋文化が流入してこなかったのだが、明治維新以降は際限なく入ってくる。情報過多の時代だったかもしれない。それを当初無条件に受け入れようとしていた。しかし、合理主義のもとに進んだ制度的近代化に対して、彼らは内面にてギャップを感じるようになる。このように、急激に変わる制度に追いつけず、矛盾だらけの行き先の見えない世の中への疑問が各作者に見受けられた。

明治時代の制度のうえでの近代化は結局民衆レベルではなじまなかつたようである。それでは日本の近代化はどのように進んでいったのか。それは次年度以降の研究課題である。

(文責 奥野真明)